

# 宣爐因縁

— 方拱乾と冒裏 —

大木 康

はじめに

清初のいわゆる「丁酉科場案」に連座し、北邊の流刑地、寧古塔（現在の黒龍江省）に家族ともども送られた方拱乾は、三年の後、赦されて江南の故地に歸ることができた。そして息子の一人に預けてあつた愛蔵の宣徳爐を再び手に取つた感慨を詩に詠じている。「再見宣徳爐 出塞時屬兒奕藏、茲攜來奉老夫玩（再び宣徳爐を見る 塞を出でし時、兒の突に屬して藏さしむ、茲に攜へ來たりて老夫に奉り玩ばしむ）」三首である（方拱乾『甦庵集』<sup>1)</sup>。その第一首と第三首。

一

莫問逢重日	問ふ莫し	重逢の日
還悲初別時	還た悲し	初別の時
關山迷去住	關山	去住に迷ひ
性命較安危	性命	安危に較る
留比青甌重	留まるは青甌の重きに比し	
歸同白璧奇	歸るは白璧の奇なるに同じ	
意中光怪在	意中	光怪在り

三

遙か彼方、生きて還れるとも思われない寧古塔に行つてからも、この香爐のことをしばしば思い出していた。まさか再びこの香爐にめぐりあえるとは思ひもしなかつた。香爐が無事に残っていたのは、青甌（名家に傳來の寶物。『晉書』王獻之傳）の價値があり、再び己の有に歸したのは、白璧が戻つたのと同じである。香爐はいつも心の中で光を放っていた。これを手にとつてもてあそんでみると、さらに輝きを増すようである。	拂拭更離離	拂拭すれば更に離離たり
追隨還屈指	追隨すること還た指を屈すれば	
四十有三年	四十有三年	
況復前朝鑄	況んや復た前朝の鑄の	
久爲當代憐	久しく當代の憐れみと爲るをや	
名山誰不朽	名山誰か朽ちざらん	
香案亦空傳	香案亦た空しく傳ふ	
好拭摩娑眼	好く摩娑たる眼を拭ひ	

指折り數えてみれば、この香爐を手に入れたのは四十三年も前のこと。その間に王朝も交替してしまい、香爐は前朝の遺物となつてしまつた。名山に藏して著述を永遠に残そうと思つても、『史記』太史公自序)、いづれ朽ち果てないものはない。高官となつて天子の香案のそば近くに仕えたとしても(元稹「以州宅夸於樂天」詩「我是玉皇香案吏 謫居猶得住蓬萊(我は是れ玉皇香案が吏、謫居すら猶ほ蓬萊に住むを得たるがごとし)」、それはむなしいこと。かすむ目をこすりこすり、香を焚き、晝に夜に佛を拜する。

方拱乾にとつて、生還の喜びを最もしみじみと實感できたのが、宣爐との再會だったのである。やがて冒襄は、この宣爐を題材にして「宣銅爐歌」を作り、さらに宣爐についての蘊蓄を傾けて「宣爐歌注」をあらわすことになる。明末清初の文人たちにとつて、宣爐とは何であつたのか。本稿では、宣爐をめぐる方拱乾と冒襄との因縁をたどつてみることにしたい。

## 一 發端

方拱乾(明萬曆二十四年、一五九六―清康熙五年、一六六六)、字は肅之、號は坦庵、安徽桐城の人。寧古塔から生還の後には、甦庵と號した。冒襄(明萬曆三十九年、一六一一―清康熙三十二年、一六九三)、字は辟疆、號は巢民、樸巢、江蘇如阜の人。方氏は桐城の名家、冒氏もまた如阜の名門である。

方拱乾と冒襄とのそもその關係は、冒襄の父、冒超宗と方拱乾とが科擧同年の閒柄であつたことにはじまる(冒襄は方拱乾に對し「年

## 宣爐因縁

伯」の稱謂を用いる)。方拱乾と冒超宗は、ともに萬曆四十六年(一六一八)の江南鄉試において擧人に中り、さらにもともに崇禎元年(一六二八)に進士に及第している。

もと南京秦淮、後に蘇州の名妓であり、やがてその側室となつた董小宛の思い出をつづつた冒襄の『影梅庵憶語』によつて、冒襄はまた桐城方氏の族人である方以智とも交遊があつたことが知られる。方拱乾から數えて七世代上に方懋という人がある。その方懋の八代目の子孫が方以智である。冒襄がはじめて董小宛に會うきっかけを作つたのが、ほかならぬ方以智なのであつた。『影梅庵憶語』のその一節。

己卯(崇禎十二年、一六三九)の初夏、白門(南京)で鄉試に應じた。密之(方以智)に會つたところ、「秦淮の美女たちの中では、いま雙成(小宛のこと)が、若くて美しい盛りで、才色ともに一番だ」という。わたしがたずねた時には、秦淮の繁華がいやになつて、家族とともに金閶(蘇州)に移つてしまつていた。やがて落第して吳門(蘇州)でぶらぶらしていた時、何度も何度も彼女を半塘にたずねていった。だが、そのとき彼女は洞庭に逗留していて戻つてこなかつた。

この崇禎十二年、方以智もまた鄉試のために南京に来ていた。方以智、陳貞慧、侯方域、冒襄の四名は當時の「四公子」と呼ばれている(韓奕「潛孝先生冒徵君襄墓誌銘」『有懷堂文藁』卷十六)。

方拱乾は進士及第の後、翰林院庶吉士に任ぜられるが、父の埋葬のために休暇を乞ひ、郷里の桐城に歸つていた。崇禎七年(一六三四)には桐城でおこつた大規模な民變である「桐變」によつて、方氏の

族は桐城を離れ、南京に難を逃れていた。<sup>①</sup>やがて再び北京に赴き、翰林院編修などを経て、詹事府少詹事の官についていた崇禎十七年（一六四四）、李自成の軍によって明王朝が滅亡する。馮夢龍『甲申紀聞』所收『紳士略』『方拱乾』には、このとき李自成に捕らえられた方拱乾が、美婢四名を賊將の羅なるものに贈って拷問を免れたとか、李自成のもとで官職につこうとしたといった記録がある。やがて清軍が李自成を追い拂って北京に入ると、方は命からがら北京を脱出し、南京に假住まいするが、今度はそこへ清軍が南下してくる。一方冒襄は、清軍南下の折に如臯を離れ、浙江の海鹽に避難する。この海鹽において、方拱乾と冒襄がめぐりあったことが、冒襄の『影梅庵憶語』、また同じく「祭方坦庵年伯文」(『巢民文集』卷七)に見える。以下は「祭方坦庵年伯文」からの引用である。

乙酉の年(順治二年、一六四五)、亡き父上が長江の上流地域で漕運の監督官になり、わたし(冒襄)は臺州の檄を捧ずることを辭し(冒襄は臺州の司李官を授けられたが赴任せず)、母を奉じて鹽官(海鹽)に難を避けた。その時、年伯と伯母とともに北京で賊難にあつて以來、苦勞を重ねて走り回つておられたが、諸兄たちを引き連れてやはり鹽官にやつてこられた。ほどなく大兵(清軍)が南下し、いくさがうち續いて、政府は再び崩壊した。兩家はすぐ近くにありながら、たがいに顧みることもなく、荒れた村、廣漠たる野をあちらこちら逃げ回つて、杜老(杜甫)の「彭衙行」に描かれたような悲惨さをすっかり經驗させられ、ついにはそれぞれ殺戮にあつたことになつてしまつた。幸いに身内の者は無事であつた。髪はぼさばさ、はきものはかずに再び城内に入った時には、伯母がみず

からわたしのために髪を剪つてくださった。宿舍が狭苦しく、わたしと三兄とは狭い軒下に寝、一枚の毛布でいっしょにくるまっていた。かくしてわたしは高熱を發してしまい、病氣のため百日もの間死んだようになっていた。ある晩、生き返ると、年伯、伯母と亡き父上、老母そして諸兄たちはみなわたしの手をとつて、心から悲しんでくれた。これより先、自分に「長夜眠らざること度歳の如く、此の時若し死なば竟に棺無からん」の句があつて、年伯と鹽官の諸君は、涙ながらにこの詩に和してくれたのであつた。年の暮になつて、危険が迫り、兩家はそれぞれ百人ほど死の危険を冒して毘陵(常州)に至つた。虎のしっぽを踏むことをおそれたがかみつかれ、人を啜はず。亨る」とある)、それぞれ生還を喜んだ。舟が長江に至つて、方氏は門人である楊太史を頼ることになり、一方亡き父上は病氣の息子を連れ、年伯と別れて郷里に歸ることになつた。

海鹽に難を避けていた時に、冒襄は「兩夜荒村」「秦溪蒙難(秦溪にて難を蒙る)」「病」「思郷」の四首の詩を作っている(『樸園詩選』)。それらに彭孫貽、陳梁、張惟赤(ともに海鹽の人)が和韻した詩がある(冒襄『同人集』卷五)。冒襄の「秦溪蒙難」の尾聯には、

人生到此無生理 人生此に到りて生くるの理無し  
回首高堂獨動情 高堂に回首して獨り情を動かす

とある。それはまことに「生くるの理無し」と思われることであつたらう。こうした危難の時を方拱乾と冒襄はともにしていたのである。

## 一一 寧古塔

冒襄は、その後もさらに二度にわたる大病をし、何とか一命をとりとめたが、順治八年（一六五一）には董小宛を失った（『影梅庵憶語』）。一方の方拱乾は、しばらく南京に過ごした後、順治十一年（一六五四）、清の内翰林秘書院侍讀の職につく。翌年、敕を奉じて『順治大訓』『內政輯要』『太祖聖訓』『太宗聖訓』等の纂修官となる。順治十三年（一六五六）には、詹事府右少詹事、兼内翰林國史院侍讀學士となつた。たしかに「貳臣」にあたるわけであるが、ある意味では順調な官途であつたといつてよい。ところが、その翌年の順治十四年（一六五七）、丁酉江南科場案がおこる。時の江南郷試の主考官は方猷、副考官は錢開宗。合格発表の後、彼らに對する反對の聲がわきおこつた。方拱乾の五男、方章鉞が、賄賂によつて合格してゐたといふのである。あるものは『萬金記』なる戯曲を作り（方から點を取れば万、金は錢の一部）、尤侗は戯曲『鈞天樂』を作つて、當事者たちをあてこすつた。また、次のような「黃鸞兒」の俗曲が流行した。

命意在題中

問題文中に出題者の意圖がこめられていた

輕貧士

貧士を輕んじ

重富翁

富翁を重んずる

詩云子曰全無用 「詩に云ふ」「子曰く」はまったく役に立たず

切磋缺工 「切磋琢磨」の工夫を缺いている

往來要通 顔つなぎが大切で（諸に往を告げて來を知る者なり）

を踏まえる

其斯之謂方能中 「其れ斯を之謂ひて」こそ合格できる（方氏は

宣爐因縁

合格、の意を掛ける）

告諸公 諸公に告ぐ（告諸往（諸に往を告げて））を用いる）

方人子貢原是貨殖家風 人を方ぶる子貢（『論語』憲問に「子貢

人を方ぶ」とある。方家の人の貢擧、の意を掛

ける）はもともとと貨殖の家風

この時の郷試の問題であつた『論語』學而篇の一章、

子貢曰、「貧而無諂、富而無驕、何如。」子曰、「可也。未若貧而樂、富而好禮者也。」子貢曰、「詩云、如切如磋、如琢如磨、其斯之謂與。」子曰、「賜也、始可與言詩已矣、告諸往而知來者。」（子貢曰く、貧しくして諂ふことなく、富みて驕ることなきは、何如。子曰く、可なり。未だ貧しくして樂しみ、富みて禮を好む者には若かざるなり。子貢曰く、詩に、切するが如く、磋するが如く、琢するが如く、磨するが如くと云ふは、其れ斯を之謂ふか。子曰く、賜や、始めて與に詩を言ふべきのみ。諸に往を告げて來を知る者なり。）

をほぼ句ごとに踏まえて作つた歌である。

順治十四年十一月癸亥、工科給事中陰應節が、「江南主考方猷等、弊竇多端にして、物議沸騰」してゐるとして、方猷らを彈劾した。

「物議沸騰」とは具體的には、戯曲『萬金記』『鈞天樂』や俗曲「黃鸞兒」などを指すであろう。順治帝は、禮部、刑部に命じてきびしく追究すべき旨を命じ、方拱乾についてはわざわざ「方拱乾着明白回奏（方拱乾には明白に事情を上奏させるように）」と名指して回答を命じてゐる（『清世祖章皇帝實錄』卷一一三）。

同年十二月乙亥、方拱乾は、自分は江南の出身ではあるが、方猷とは同族ではないから、方章鉞を合格者からはずす措置には承服できない旨の上奏をする（『實錄』卷一一三）。だが、翌順治十五年の十一月辛酉、主考官の方猷、副考官の錢開宗、そして葉楚槐をはじめとする同考官十七名、合わせて十九名が死罪、方章鉞らは、家産を籍没のうえ、父母兄弟妻子みな寧古塔に流刑、との處決が下された（『實錄』卷一一一）。

かくして、翌順治十六年の閏三月に、方拱乾は、六人あった息子のうち、六男の奕箴以外の五人の息子たちをはじめ、眷屬數十人とともに北京を出立し、七月、流刑の地寧古塔（現在の黒龍江省、牡丹江の近く寧安縣）に到着する。寧古塔は清初の當時、政治犯たちの流刑地となっており、ここに流された著名人は少なくない。

方拱乾は、生還しての後、『寧古塔志』を書き残している。その序文には、

寧古はどのような土地であろうか。そこに人が住める理はなく、生還できる理もないのである。老夫はそこに行つて戻つてきた。これは天というものではないか。

とあり、「天時」では、

四時いつも冬のようなのである。七月には露がある。露が冷たくなると白くて米のとき汁のようである。露があつて数日たつと、霜がおろり。霜がおろると百花すべてがしぼんでしまふ。八月の雪は常のことである。ひとたび雪が降ると、地面は氷つて、翌年の三月にな

らないと融けない。五、六月も中華の二、三月くらいである。

とその氣候風土のきびしさを述べている。

寧古塔は流論の地であつたが、必ずしも行動の自由が奪われていたわけではなかつたようで、同時に流されていた人々と交際することは可能であつた。方拱乾と交際のあつた人の中に、やはり丁酉科場案によつて寧古塔に送られた吳兆騫があつた。吳兆騫の『秋笈集』卷八「戊午二月十一日寄顧舍人書（戊午二月十一日、顧舍人に寄するの書）」には、「龍眠父子、與弟同謫三年、情好殷摯、談詩論史、每至夜分（龍眠父子、弟とともに謫せらるること三年、情好殷摯たり、詩を談じ史を論じて、毎に夜分に至る）」とあつて、方拱乾父子は、吳兆騫と親しく行き來していたことが知られる。

方拱乾の『何陋居集』己亥年（順治十六年、一六五九）には、「同漢槎談黃山勝分賦（漢槎とともに黃山の勝を談じ分賦す）」詩二首がある。漢槎、すなわち吳兆騫とともに、黃山の勝景について語つたという詩の第一首。

此生寧有再遊時	此の生寧くんぞ再遊の時有らん
對爾深談如見之	爾に對して深く談ずれば之を見るが如し
但是江南山已好	但だ是れ江南の山已に好し
況經身歷勝難追	況んや身歷を経て勝の追ひ難きにおいてをや
夢回絕塞孤雲遠	夢より絕塞に回れば孤雲遠く
口代枯藤萬壑卑	口は枯藤に代はりて萬壑卑し
半臂九華曾否在	半臂の九華曾ち在らず
荒唐宗少使人疑	荒唐なり宗少 人をして疑はしむ

生きてゐる間に、再び黄山に遊ぶことができるはずはあるまい。しかしながらあなたと黄山について語っていると、あたかもそれを見るような氣がする。江南の山はそれ自體すでにすばらしいうえに、みずから實際おとずれた場所であることを思うと、山のすばらしさがひときわ思われる。黄山の夢からさめると、この絶域に孤雲が遠くたなびいている。枯藤の杖を曳く代わりに言葉で表現することになつても、山は高く萬谷は深い。關文衍は、身を常に雲泉の内に置きたいといつて、半臂に九華山の圖を描かせたといふし（『雲仙雜記』卷二）、宗炳（字は少文）は、かつて自分がへめぐつた名山の圖を部屋中に描かせていたといふ（『宋書』宗炳傳）。そのようなことがほんとうにあつたのだろうか。塞北の地にあつて、故郷江南の名勝を思う心持ち、いかにばかりであつたらう。

順治十八年（一六六一）十月、方氏一族が寧古塔に着いてから三年目のこと、方拱乾のもとに放免の知らせが届く。方拱乾の孫の方嘉貞が力を致して、北京城の阜成門を私財を投じて修理したことによる特赦であつた。方孝標の「先大夫詩後集後序二 甦庵集」（『光啓堂文集』）によれば、辛丑（順治十八年）八月のある晩、方拱乾の夢の中に一人の道士が「甦」の字を大書した黄色い紙を手持ってあらわれ、「君は歸つたらこれを號とせよ」といったという。方拱乾は、それに従つて、生還の喜びをこめてみずから甦庵と號している。

方拱乾が赦免にあい、戻つてくるとの報は、如臯の冒襲のもとにももたらされた。たまたまこの時、方拱乾の六男、奕箴、字は謙六が、如臯冒襲の水繪園に滞在していた。方奕箴は方拱乾らを迎えるため、ただちに北京に向けて出立する。冒襲はそれを送る詩を作っている。

### 宣爐因縁

「水繪庵送方謙六之燕、喜坦庵年伯伯母及諸世兄入關。客夏小阮、長文過我五旬、今與謙六又共歲寒兩月。病子支離之苦、與衰門詬諍之狀、曾入見聞。趨庭之暇、當爲及之（水繪庵に方謙六の燕に之くを送り、坦庵年伯、伯母及び諸世兄の關に入るを喜ぶ。客夏、小阮（顧予成）、長文（方嘉貞）の我を過ぎること五旬、今謙六と又た歲寒兩月を共にす。病子支離の苦と衰門詬諍の狀と、曾て見聞に入る。趨庭の暇、當に爲に之に及ぶべし）」（『稟民詩集』卷五）である。

茅堂兩月共悲歌	茅堂 兩月 悲歌を共にす
送子辭家意若何	子の家を辭するを送る 意 若何
萬里窮邊迎白髮	萬里 窮邊 白髮を迎へ
五更獨客走黃河	五更 獨客 黃河に走る
長途斥堠烽煙盛	長途 斥堠に烽煙盛んにして
逼歲資裝雨雪多	逼歲 資裝に雨雪多からん
自是天涯懸老眼	自らは是れ天涯に老眼を懸くるならん
揚鞭速去莫蹉跎	鞭を揚げ速く去れ 蹉跎すること莫れ

萬里の彼方、夜を日について、北の方まで白髮の人を迎えに行く。道中はきびしいであろうが、年老いた人が心待ちにしているにちがいない。さあ急いで北京に向かうがよい、という詩である。本稿のはじめに掲げた方拱乾の「再び宣德爐を見る」詩の題にあつたように、方拱乾が寧古塔に向かうにあつて、宣德の銅爐を預けたのが、ほかならぬこの方奕箴なのであつた。

康熙元年（一六六二）の正月には方拱乾は北京に戻り、秋には淮陰に假住まいしていた。そして翌康熙二年（一六六三）、揚州にやつて

くる。冒襄は、八月にまず二人の息子を揚州に遣わし、方拱乾をたずねさせる。方は「癸卯八月、邗上寓館喜冒穀梁青若兄弟過訪、寄柬辟疆（癸卯八月、邗上の寓館にて、冒穀梁、青若兄弟の過訪を喜び、柬を辟疆に寄す）」（『同人集』卷六）の詩を作つて冒襄に贈つてゐる。そしてその十月、冒襄はみずから揚州に方拱乾をたずねてゆく。方拱乾に「癸卯十月喜晤辟疆年世兄（癸卯十月、辟疆年世兄に晤するを喜ぶ）」（『同人集』卷六）の詩がある。

勞子霜江特地尋

乍逢不記幾年深

細詢三度浮沈字

益信從前契濶心

宿草尙餘吹笛淚

飛蓬莫問出關吟

生還兩載纒相見

懷抱艱辛直到今

勞す 子の霜江に特地に尋ぬるを

乍ち逢へば 記せず 幾年の深きかを

細かに詢ぬ 三度浮沈の字

益ます信ず 従前契濶の心

宿草 尙ほ餘す吹笛の涙

飛蓬 問ふ莫れ 出關の吟

生還 兩載 纒かに相見る

艱辛を懷抱して直ちに今に到る

あなたがわざわざ揚州までたずねて来てくれてうれしい。あなたに會つと、これまでの長いつきあいが思い出される。「浮沈」は出した手紙が届かないこと（『世說新語』任誕篇の殷羨の故事）。出したはずの三通の手紙について、そして同時にこれまでの我が人生の三度の浮き沈み（李自成のこと、清軍南下のこと、寧古塔のこと）について話していると、ますます古くからの情誼が思われる。冒超宗は亡くなつたが、その昔がしのばれる。冒廣生編『冒巢氏先生年譜』によれば、冒襄の父冒超宗は順治十一年（一六五四）に世を去り、順治十六年

（一六五九）に葬られている。「宿草」は『禮記』檀弓上に見え、友人の墓にはえる草。「吹笛」は晉の向秀の「思舊賦」序に見え、今は亡き友人と過ごした時を悲しみしのお意。自分はその間、風に舞う蓬のように、塞北の地に流されていた。生きて還つてから二年目にして、やっとあなたと會うことができた。今日會つて、ようやくこれまで抱き續けてきた艱難辛苦の思いを忘れることができる、とその再會の喜びを詠じている。おそらくこの時、方拱乾は冒襄に愛蔵の宣爐を示したのであろう。

三 宣銅爐歌

冒襄は、方拱乾の所蔵していた宣爐を長編の詩に詠む。「宣銅爐歌爲方坦庵先生賦」（『巢氏詩集』卷二）である。

龍眠先生鬚髯皓

兩朝鼎貴稱鳴珂

絲綸世掌遭遷播

邗江賣字書學窠

生平嗜古人骨髓

玩好不惜三婆娑

有爐光怪更異絕

肌膩肉好神清和

窄邊蚰耳藏經色

黃雲隱躍弱珮磨

窪隆豐殺中規矩

紅榴甘黛紛蠶蟬

龍眠先生鬚髯皓し

兩朝の鼎貴 鳴珂と稱す

絲綸世に掌るも遷播に遭ひ

邗江に字を賣りて學窠を書す

生平 古を嗜むこと骨髓に入り

玩好 惜まず 三たび婆娑たるを

爐有り 光怪更に異絶

肌膩にして肉好ろしく 神 清和なり

窄邊 蚰耳 經色を藏し

黃雲 隱躍 珮磨を窮む

窪隆 豐殺 規矩に中り

紅榴 甘黛 蠶蟬紛る

我時捧視驚未有  
精光迸出呼奈何

恭聞此爐始宣廟  
制器尙家勤搜羅

宮闈風雅厭奇巧  
爐鞴精妙無偏頗

或云流烏一夜鎔寶藏  
首陽銅枯汁流陀

或云煉銅十二取精液

式倣官窰非兩犧  
彝乳花邊稱最上  
魚蚰諸耳無相過  
博山睡鴨眞俗醜

宋燒江製咸差訛  
工倅撥蠟照千古

香籠火煖浮金波  
宜香宜火宜几席  
豈惟鑑賞堪吟哦

百金重購擬和璧

宣爐因緣

我 時に捧げ視て未だ有らざるに驚く  
精光 迸り出づるを奈何と呼ぶ

恭聞す 此の爐 宣廟に始まる  
器を制するに象を尙びて搜羅に勤めり

宮闈の風雅 奇巧を厭ひ  
爐鞴 精妙にして偏頗無し

或は云ふ 流烏 一夜 寶藏を鎔し  
首陽 銅枯れて 汁 陀を流すと(黃帝

本紀の「索隱」。陀は赤色)  
或は云ふ 銅を煉ること十二たびにして

精液を取り  
式は官窰に倣ひ 兩犧に非ずと  
彝乳 花邊 最上と稱し  
魚蚰 諸耳 相過ぐる無し  
博山 睡鴨 眞に俗醜(博山、睡鴨は香

爐)  
宋燒 江製 咸な差訛あり  
工倅の撥蠟 千古を照らし(工倅は堯の

時代の名匠。撥蠟は鑄造の技法)  
香籠 火煖かにして金波浮ぶ  
香に宜しく 火に宜しく 几席に宜し

豈に惟だに鑑賞して吟哦に堪ふるのみな  
らんや  
百金もて重購し 和璧に擬し

梅檀函貯文犀馱  
後來北鑄竝南鑄  
道南施蔡皆公魔

亂眞火色終枯槁

磨冶彫鑿蛟龍呵

平生眞賞惟饑閑

同我好沈江河

撫今追昔再三嘆

憐汝不異諸銅駝

一爐非小關一代

列聖德澤相漸摩

我今爲公作此歌

萬事一往何其多

歌成乞公書大字

明日更換山陰鸞

梅檀もて函貯し 文犀もて馱す  
後來 北鑄 竝びに南鑄  
道南、施蔡 皆公魔たり(公魔は、取る

に足らぬの意)  
眞を亂す火色 終に枯槁す

磨冶 彫鑿 蛟龍の呵

平生眞に賞するは惟だ饑閑のみ  
我が最も好めると共に江河に沈む

今を撫して追昔し再三嘆す  
汝の銅駝に異ならざるを憐れむ

一爐 小に非ずして一代に關はり  
列聖の德澤 相漸摩す

我 今 公の爲に此の歌を作る  
萬事 一たび往きて何ぞ其れ多きや

歌成り公に乞ひて大字を書し  
明日 更に換へん山陰の鸞

方拱乾の持っている宣銅爐について、そのすばらしさを、銅爐につ  
いての専門用語を駆使して描き出した詩である。末尾は、この「宣銅  
爐歌」ができあがったら、方拱乾に大字を書いてもらい、手書した  
『道德經』と鸞とを交換した王羲之(『晉書』王羲之傳)よろしく、自  
分も鸞と交換することにしよう、と書いて結んでいる。陳維崧(明末  
「四公子」の一人、陳貞慧の息子)の「賣字翁歌 爲龍眠方坦庵先生  
賦」(『湖海樓詩集』卷二)によっても、寧古塔から歸還後の方拱乾は、  
みづから「賣字翁」と稱し、それによって生活していた様子がある



われる。その「賣字翁歌」の末尾が、「賣字且換東家酒（字を賣りて且く換へん 東家の酒）」の句で結ばれているのは、この詩の末句と關わっているであろう。

方拱乾は、冒裏からこの詩を贈られて、直ちに「爲宣爐謝辟疆」の詩を作っている（『同人集』卷上）。

爐傳宮鑄舊 爐は宮鑄の舊を傳へ

得子品題眞 子の品題の眞なるを得たり

物亦感知己 物も亦た知己に感じ

情非諛老人 情は老人に諛ふに非ず

千秋爭璞玉 千秋 璞玉と争ひ

一顧幾麒麟 一顧 麒麟に幾し

久笑囊如洗 久しく囊洗ふが如くなるを笑ふも

今朝頓不貧 今朝 頓に貧ならず

これだけのみごとな詩を贈ってもらい、にわかに裕福になったようだ、といつてその喜びを傳えている。「麒麟に幾し」とあるのは、永樂十二年（一四一四）、同十三年（一四一五）、宣德八年（一四三三）などに外國から麒麟が献上されていること（『明史』卷七、九）を指すであろうか。冒裏はこの詩に對して、さらに「坦庵年伯爲宣爐作致謝詩。即刻步韻（坦庵年伯 宣爐の作の爲に謝詩を致さる。即刻步韻す）」（『巢民詩集』卷三）を作っている。

さて、冒裏の「宣銅爐歌」であるが、そこには銅爐に關する用語が多く用いられ、はなはだわかりにくいために、冒裏はみずから「宣爐歌注」を作っている。いくつか例を示せば、詩中の「爐有り 光怪更

に異絶 肌膩にして肉好ろしく神 清和なり」の句に對しては、

宣爐が最もすぐれているところは、その色にある。偽物の色は外に輝き出るが、本物の色は内にとけ込んで、薄暗くかすかな中に奇光を發するのである。それはまさしく好女子の皮膚がやわらかく、觸れるによいものようである。

とあるし、「銅を煉ること十二たびにして精液を取り 式は官竈に倣ひ 兩轆に非ず」に對しては、

宣德帝は鑄工に、銅は何回精鍊すればよいのかとおたずねになった。鑄工は、六回すると、殊光寶色があらわれますとこたえた。陛下は、十二回するようにとお命じになった。それからまた眞つ赤に溶けた銅を鋼鐵の篩の上に流し込み、その最も清らかで、先にしたり落ちたものを取つて爐を作らせ、格子の上に残ったもので、その他の器を作らせた。爐の形としては、三代の鼎鬲にかたどるのではなく、多くは宋の磁爐の形式を取つてそれにならった。

また「後來 北鑄 並びに南鑄 道南 施蔡 皆么魔たり」に注して、

嘉靖以後の學道、最近の施家はいずれも北鑄である。北鑄ではまゝ宣銅器を用いて改鑄することがあるが、銅は清液ではない。また小さな冶金工のものは、貧しいために精彩を缺いている。まずは施は學道にはるかに及ばない。南鑄では蔡家が甘家に勝っている。蔡

の魚耳は學道とならぶことができるだろう。<sup>20</sup>

として、後世の銅器がやはり宣徳時期のものよりも劣ることを述べている。さらに、「饑闇」については次のようである。

饑闇とは、毘陵（常州）の鄒臣虎先生（鄒之麟）が吳道子の描いた觀音の眞跡を供養した場所である。いつも先生と閣前で宣爐を鑑賞したが、それは天鷄圓鼎などの外およそ六、七種であった。わたしは別に記を作った。わたしの持っていた最もよいもの一二とともに、甲申乙酉の間に散逸してしまった。<sup>21</sup>

王漁洋がその『池北偶談』卷十五「宣爐注」の條で、冒裏の「宣銅爐歌」を取り上げ、「自ら之が注を爲り、甚だ精核たり」と評している。また王漁洋が舊知の詩を集めた『感舊集』卷六「冒裏」の條では、冒裏の作品として「宣銅爐歌」と「小秦淮曲」の二首を掲げている。この「宣銅爐歌」は冒裏の作としてとりわけ人口に膾炙していたと思われる。

#### 四 宣爐

さて、方拱乾が生還の喜びをひとしおに感じた宣爐、そして冒裏がわざわざ「宣銅爐歌」を作り、その注を作った宣爐とはいったい何であったか。

宣爐とは、その名の通り明初の宣徳年間（一四二六―一四三五）に鑄造された香爐のことである。當時、明は永樂帝の時代にはじまった鄭和の大航海に象徴されるように、國力を誇った時代であった。暹邏

#### 宣爐因縁

國（現在のタイ）の刺迦滿爾が、風磨銅三萬九千六百斤を献上した。これを契機として、その他にも各地のさまざまな原料を用いて、宣徳帝は香爐を鑄造することを命じた。そこでは、すでに觸れたように最高十二回にもわたって精鍊が行われ、さまざまな形の香爐五千餘座が鑄造された。<sup>22</sup> 明代の末頃には、『宣徳彝器圖譜』二十卷（嘉靖五年、一五二六、祝允明の序を付す）他の專著が編まれるなど、その評價は定まっていたようである。もっとも明末の賞鑑家として知られる項元汴の『宣爐博論』に、

宣廟時代に宮中で鑄造された鼎彝は、現在残っているものでは本物は十に一つ、僞物が十に九といったありさまである。<sup>23</sup>

とあるように、僞物もまた數多く作られるに至っている（ちなみに、魯迅の「阿Q正傳」において、にせ毛唐と趙旦那が、「革命」のために尼寺靜修庵にあった「皇帝萬歲萬々歲」の龍牌を破壊しに來た時、「尼さんがふと見ると、觀音様に捧げてあった宣爐がなくなっていた」とある。いいものはちゃんと持ち去ったわけである）。

宣爐が珍重されたのは、一つには、それが明王朝の國力の象徴でもあったからである。冒裏の「宣銅爐歌」において、

撫今追昔再三嘆	今を撫して追昔し再三嘆す
憐汝不具諸銅駝	汝の銅駝に異ならざるを憐れむ
一爐非小關一代	一爐 小に非ずして一代に關はり
列聖德澤相漸摩	列聖の德澤 相漸摩す

とあったのは、もとよりそのことを指している。「銅駝」は、素靖が洛陽の宮門の前にあった銅駝を見て、「そのうちきつと荆棘の中に汝を見るであろう」といった故事（『晉書』素靖傳）を踏まえる。宣爐を懐かしむことは、清の世にあって、明の世を懐かしむことにつながるのであった。「宣爐歌注」をその『昭代叢書』に収めた張潮が「宣爐歌注」の「小引」に、

よい物は、あるいは人によって名づけ、あるいは地によって名づけ、あるいは時代によって名づけられる。名はちがっても、その物がよい物である点では同じである。例えば時の壺、哥の窯、張の爐、顧の繡などはいずれも人によって名づけられたものである。并州のはさみ、蒙山の茶、歙州の硯、湖州の筆などは地によって名づけられたものである。商彝周鼎、秦壘漢碑などは時代によって名づけられたものである。そもそも一物の徴であって、わざわざ一代の名をつけられるに至り、その名が長い時間がたつてみれば、時代はすでに滅んでも、物は不朽なのである。物が時代によって重んじられるのであるうか。それとも時代が物によって重んじられるのであるうか。有明三百年間、よい物は数えるにいとまがない。しかし、宣爐一種は、まことに前に師とするところなく、後に繼ぐものなく、まったく宇宙間一の絶妙な骨董ではなからうか。

と述べているのも、宣爐への愛好と宣徳時代への敬慕とが混じり合っていることを示しているであろう。

冒裏はかねてから香に關心を持ち、宣爐も所蔵していたようである。『影梅庵憶語』に次の一節がある。

寒い晩に小さな部屋で、四方に玉のカーテンを掛け、しきものを重ね、二尺ほどの赤いろうそくを三本燈してある。室内はちらちらとおり、臺や机もあちらこちらにめちやくちやに置かれている。大小いくつかの宣爐にはずっと熱く火が燃えさかっており、色は金を溶かしたよう、玉の粒のようである。氣をつけながらそこに一寸ほどの炭火をかきたて、灰の上に砂を隔てて香を選んで置き、蒸してやると、眞夜中になって、香がたちもとほり、焦げず盡きず、あたりをただよって、混じりけのない糖結の香りであった。香をあたためている間に、半ば開いた梅の花の香り、鵝梨や蜂の巢のような香りが、靜かに鼻に入ってくるのであった。年來この味の境地を樂しみにして、いつも夜明けの鐘がなってもまだ床につかず、彼女と細かに閨怨を思い、「斜めに薰籠により」（白居易「後宮詞」）に「斜倚薰籠坐到明」。「寒爐をすっかりかきたてる」（呂蒙正の詩句に「撥盡寒爐一夜灰」といった境地を味わうのであった。するとわたしたち二人は、さまざまな香氣ただよう蕊珠宮の奥深くにいるように思われるのであった。今や人も香氣とともに散じてしまった。返魂香の一粒でも手に入れて、この暗く閉ざされた部屋にたつてほしいものである。

とあって、董小宛とともに夜香を焚いた時に、宣爐を並べていたことを記している。また、同じ『影梅庵憶語』に、

彼女の衣裳や寶飾品などは、戦災のうちにすべて失われてしまった。歸ってきてからは少しのもので満足し、一物も置こうとしなかつた。

た。戊子（順治五年、一六四八）の年の七夕、空の夕焼けを見ていて、彼女は急に金の腕輪に文字を彫ってほしいといい、わたしに「乞巧」の二字を書かせたが、對になる文字を思いつかなかった。彼女は「以前、黄山の大きな家で、覆祥雲の眞宣爐を見ましたが、その形はすばらしいものでした。覆祥を乞巧の對にしてください」といった。彫り上がってみるとなかなかすばらしいものであった。その一年後、腕輪が突然眞ん中で割れてしまった。

とも記されている。「覆祥」について、邵銳の『宣爐彙釋』『釋色』に「覆祥雲」の一條があり、「赤金の耳、口、頸及び腹上に流るる者を覆祥雲と名づく」とある。「覆祥」は、讀み方によっては「吉祥を覆がえす」とも取れ、それが董小宛の不幸な若死を暗示していたといえる。宣爐はまた冒裏にとって、今は亡き董小宛の思い出に結びついているのである。

### 結び

冒裏の友人であり、南京秦淮の掌故を述べた書物『板橋雜記』の著者である余懷は、『冒巢民先生七十壽序』（『同人集』卷二）において、次のように述べている。

巢民は平素から多く美人たちに圍まれ、女優や樂師たちを好んで蓄え、園林花鳥、法書名畫などを一生懸命集めている。とりわけ賓客を好み、家に水繪庵、小三吾亭などをしつらえて、客がやってくると、決まって引き留めること數十日、酒を飲み、詩を賦して、すっかり夢中になってようやく去らせるのであって、玉山清閨（元の顧

### 宣爐因縁

瑛と倪瓚）の風があった。しかしながら、わたしの見るところ、巢民が美人を擁しているのは、色を漁るためではない。女優や樂師を蓄えているのは、音楽に淫しているからではない。園林花鳥、飲酒賦詩も、酒を飲んで廣く人と交わり、その名聲を天下に賣ろうというのではない。それはひとえにそこに寄託するところがあるからである。古の人は胸のうちに感憤無聊不平の氣がおこると、必ず一事一物に寄せて、そのもやもやははらしたのである。信陵君が酒を飲み、婦人を近づけたのも、嵇叔夜（康）における鍛冶、劉玄德（備）における結託、劉伯倫（伶）における鋤擔ぎ、米元章（芾）における拜石などなど、いずれもそれなのである。巢民は思いをこれらに寄せて詩歌を作り、それが篇帙を重ねるようになった。もし天下後世の者が、その書を読み、その人を想い見るならば、信陵君や元章のような人物であると思つて何の悪いことがあるらう。

冒裏が女性に關心を持ったり、さまざまに興味にひたっているのは、「感憤無聊不平の氣」がそこに寄せられているからだ、というのである。おそらくそれは、この壽序の作者であり、『板橋雜記』をあらわした余懷にしても同じことであらう。

冒裏が「宣銅爐歌」を作ったのは、まずは方拱乾のためであるが、その奥には、亡き董小宛との思い出があり、さらにまたその奥には、今は滅び去った明朝への思慕がある。宣爐には、それらさまざまな思いが凝集しているのである。

### 注

（一）方拱乾の詩集には『何陋居集』（復旦大學圖書館藏）、『方簫事集』

『何陋居集』と『甍庵集』からなる。上海圖書館蔵、『臺堂集』(内閣文庫蔵)の三種が残る。前二者について、李興盛・張文玲・方承による校訂排印本『方拱乾詩集』(黒龍江教育出版社 一九九二)がある。

(2) 「松龕」は佛をおさめた厨子であろうが、梁の庾肩吾の「亂後經夏禹廟」詩に「松龕撤暮俎、棗逕落寒叢(松龕 暮俎を撤し、棗逕 寒叢に落つ)」の句があり、松龕は、夏禹の神主であるとす。侯景の亂後の夏禹廟のさまを詠じた詩である。

(3) 冒襄の「祭方坦庵年伯文」(『巢民文集』卷七)に「戊午與先君舉于鄉、戊辰又借捷南宮(戊午の年、萬曆四十六年に先君とともに郷試に及第し、戊辰の年、崇禎元年とともに北京での會試に合格した)」とある。桐城(安慶府)、如皋(揚州府)ともに南直隸に屬し、郷試は南京で行われた。朱保焯・謝沛霖『明清進士題名碑錄索引』(上海古籍出版社 一九八〇)「歷科進士題名錄」崇禎元年戊辰科の第二甲第五名に方拱乾が、第三甲第八名に冒超宗の名が見える。

(4) Pierre-Henri Durand, *Lettres et pouvoirs. Un procès littéraire dans la Chine impériale*, Editions de L'École des hautes études en sciences sociales, 1992の三十四頁に載せる桐城方氏系圖による。謝正光『清初詩文與士人交遊考』(南京大學出版社 二〇〇一)にも系圖を載せる。

(5) 己卯初夏、應試白門。晤密之云、秦淮佳麗、近有變成、年甚綺、才色爲一時之冠。余訪之、則以厭薄紛華、挈家去金閨矣。嗣下第浪遊吳門、屢訪之半塘。時逗留洞庭不返。

張明弼の「冒姬董小宛傳」には、「辟疆同密之屢訪(辟疆密之とともに屢訪ぬ)とあり、冒襄は方以智とともに董小宛をたずねていたことになる。『影梅庵憶語』については、拙稿「冒襄『影梅庵憶語』譯注(一)(二)(三)」『東洋文化研究所紀要』第三十六、一三七、一三八冊 一九九二、二〇〇〇)を参照されたい。

(6) 任道斌『方以智年譜』(安徽教育出版社 一九八三)崇禎十二年の條。

南京秦淮の色町と江南貢院の結びつきについては、拙著「中國遊里空間 明清秦淮妓女の世界」(青土社 二〇〇二)第三章「秦淮散策」を参照されたい。

(7) この崇禎七年、桐城における「桐變」については、吉尾寛「崇禎七年・安慶府桐城縣における「桐變」(小野和子編『明末清初の社會と文化』京都大學人文科學研究所 一九九六、また同氏『明末の流賊反亂と地域社會』汲古書院 二〇〇一にも收む)に詳しい。吉尾氏の論文では、「桐變」の根本原因は、方拱乾の兄方應乾及び、その權力をかさに着た奴僕たちに對する民衆の怒りが爆發したものとされる。吉尾論文に引く張國維の「回奏桐事疏」には、方拱乾の名も挙げられている。

(8) 乙酉先大夫督漕上江、襄辭捧臺州之檄、奉母避難鹽官。時年伯與伯母俱自北都被賊難、顛沛奔走、率諸兄亦來鹽官。未幾、大兵南下、連天烽火、再見崩圯。兩家咫尺不相顧、荒村漠野、竄逐東西、備歷杜老彭衙之慘、卒各罹殺掠。幸俯仰俱亡恙。蓬跣再入城、伯母親爲裹剪髮。旅館偏側、襄與三兄寢簷隙、以一氈竝裹而坐。遂致寒症、寢疾百日死。一夜復生、年伯伯母與先大夫老母及諸兄皆執襄手悲傷慘痛。先一日襄有長夜不眠如度歲、此時若死竟無棺之句。年伯與鹽官諸君、含淚和之。殘臘櫻險、兩家各以百口冒死抵毘陵、履虎不啞、各慶生還。舟泊河干、依貴門人楊太史、先大夫攜病子與年伯別歸里。

方氏の側でも、方孝標(玄成)『光啓堂文集』「冒母馬太恭人八十壽序」において、冒襄の母である馬氏のこの時の思い出を記している。

(9) 方拱乾を含む方氏の處世については、謝正光「讀方文『翁山集』——清初桐城方氏行實小議」(前掲『清初詩文與士人交遊考』)に詳しい。

(10) 丁酉江南科場案については、孟森「科場案」(『心史叢刊』集)の「江南闈」、また謝國禎「清初東北流人考」(『明末清初の學風』人民出版社 一九八二)三「順治丁酉(一六五七)科場獄案與吳兆騫孫鳴等之流徙」、商衍鑾「清代科場考試述錄」第八章「科場案件與軼聞」第二節

「清代科場案」ほか。

- (11) 薛若鄰『尤侗論稿』（中國戲劇出版社 一九八九）五「尤侗的戲曲創作」。

- (12) 法式善『清秘述聞』卷一「順治十四年丁酉科鄉試 江南」に「題『子貢曰貧』全章」とある。この歌は、前掲商衍鏞『清代科舉考試述錄』に見える。

- (13) 前掲、謝國禎「清初東北流人考」、また何宗美「明末清初文人結社研究」（南開大學出版社 二〇〇三）第六章第五節「七子之會及寧古塔流人群體的創作」。寧古塔については、寧古塔を中心とする東北部滿洲の沿革』南滿洲鐵道哈爾濱事務所調査課、一九二五。

- (14) 寧古何地。無住理、亦無還理。老夫既往而復還。豈非天哉。

- (15) 四時皆如冬。七月露。露冷而白如米汁。流露之數日即霜。霜則百卉皆萎。八月雪、其常也。一雪、地即凍。至來年三月、方釋。五、六月如中華一、三月。

- (16) 方拱乾の長子玄成（孝標）は、その没後におこった戴名世『南山集』案にあって、遺體を磔にされる極刑にあってゐる。戴名世また桐城の人。『南山集』案については、大谷敏夫『清代政治思想史研究』（汲古書院 一九九一）第一部第三章「戴名世斷罪事件の政治的背景」に詳しい。方氏一族との關わりにも觸れる。

- (17) 道光『桐城續修縣志』卷十一 人物志 孝友 方嘉貞。

- (18) 陳維松の『湖海樓詩集』卷一に「宣銅爐歌爲桐城方坦庵先生賦」を收めてゐる。冒襲のものと同文である。どういふ理由でここに收められたのか、不明である。

- (19) 宣爐最妙在色。假色外炫、眞色內融、從黯淡中發奇光。正如好女子肌膚柔膩可掬。

- (20) 宣廟詞鑄工銅幾鍊始精。工對以六火則殊光寶色現。上命煉十二火條之。復用赤火鎔條於鋼鐵飾格上、取其極清先滴下者爲爐、存格上者製他器。

### 宣爐因緣

爐式不規三代鼎鬲、多取宋瓷爐式倣之。

- (21) 嘉靖後之學道、近之施家、皆北鑄。北鑄閒用宣銅器改鑄、銅非清液。又小冶寒儉無精采。且施不如學道多矣。南鑄以蔡家勝甘家。蔡之魚耳、可方學道。

- (22) 懺閣乃毘陵鄭臣虎先生供吳道子觀音真跡處。每與先生閣前鑑賞宣爐、自天錫圓鼎外凡六七種。余有別記。同余最妙一二統散失於甲申之西。

- (23) 趙汝珍『古玩指南』第六章「宣爐」、『古玩指南全編』と題して北京出版社 一九九二、また『古玩指南』中國書店 一九九三。

- (24) 宣廟宮鑄鼎彝、及今所存、眞者十一、贗者十九。

- (25) 物之佳者、或以人名、或以地名、或以代名。名雖不同、其爲物之佳則一也。如時之靈、哥之窰、張之爐、顧之纒、皆以人名者也。如并州之剪、蒙山之茶、歙州之硯、湖州之筆、皆以地名者也。至於商彝周鼎、秦壘漢碑則以代名者也。夫以一物之微而致煩一代之名、名之及其久也、代已亡而物尤不朽。豈物以代重耶、抑代以物傳耶。有明三百年間、物之佳者、不可勝數。而宣爐一種則誠前無所師、後莫所繼、豈非宇宙間一絕妙骨董乎。

- (26) 寒夜小室、玉幃四垂、氍毹重疊、燒二尺許絳蠟二三枝。陳設參差、臺几錯列。大小數宣爐、宿火常熱、色如液金粟玉。細撥活炭一寸、灰上隔砂選香蒸之、歷半夜、一香凝然、不焦不竭、鬱勃氤氳、純是糖結。熱香間有梅英半舒、荷鵝梨蜜脾之氣、靜參鼻觀。憶年來共戀此味此境、恒打曉鐘、尙未著枕、與姬細想閨怨、有斜倚薰籠、撥盡寒爐之苦。我兩人如在蕊珠衆香深處。今人與香氣俱散矣。安得返魂一粒、起於幽房扇室中也。

- (27) 姬之衣飾、盡失於患難。歸來澹足、不置一物。戊子七夕、看天上流霞、忽欲以黃鵠脫羣之、命余書乞巧二字、無以屬對。姬云、曩於黃山巨室、見覆祥雲眞宣爐、款式絕佳。請以覆祥對乞巧。鶴舉頗妙。越一歲、劍忽中斷。

- (28) 巢民生平多擁麗人、愛蓄聲樂、園林花鳥、法書名畫、充牣周旋。尤好

賓客、家有水繪庵小三吾。客至必留連數十日、飲酒賦詩、淋漓傾倒而後去、有玉山清闊之風。然自我觀之、巢民之擁麗人、非漁於色也。蓄聲樂、非淫於聲也。園林花鳥、飲酒賦詩、非縱酒泛交、買聲名於天下也。直寄焉爾矣。古之人胸中有感憤無聊不平之氣、必寄之一事一物、以發洩其壅噎、如信陵君之飲醇酒、近婦人、嵇叔夜之鍛、劉玄德之結託、劉伯倫之荷鏞、米元章之拜石、皆是也。巢民寄意於此、著爲詩歌、盈篇累帙、使天下後世、讀其書、想見其人、即以爲信陵元章何不可者。